

うずめられた鏡

小川未明

青空文庫

のち
 後になつてから、鳥帽子岳えぼしだけという名ながついたけれど、むかしは、
 ただ三角かくがた形の山やまとしか、知しられていませんでした。山やまがはじめ
 て、地上ちじょうに生うまれたとき、あたりは、荒涼こうりょうとして、なにも、
 目めにとまるものがなかつたのです。

そのとき、はるか北きたの方ほうに、紫むらさき色いろの光ひかる海うみが見みえました。

「あれは、なんだろう。」と、山やまは思おもいました。この大自だいしぜん然ぜんに
 ついて、なにも知しらなかつた山やまは、日ひがででて、やがて日ひの暮くれる
 までの間あいだに、いくたびとなく、かわる海うみの色いろを見みて、ふしぎに感かん
 じたのです。しかし、からだのうごかさねぬ山やまは、ただ、いろい
 ろと、自然しぜんを空くう想そうするばかりでした。

「どうすれば、あすこに、いくことができるだろうか。」

そのとき山は、大きな風がふいて、自分をうごかしてくれはせぬかと思ひました。しかし、かつてそんなような、大きな風のふいたことがありません。こうして、ひとりぼっちでいる山は、そのころ、海だけが、なんだか自分と運命を一つにするような気がして、どうか、おたがいに、知り合いに、なりたいたねがいました。

お空をあおげば、星が毎夜のごとく笑ったり、目で話したりしますけれど、山はもっと身近に、友だちを持ちたかったのでした。

ある日、海の色が、とりわけ、きれいにさえて見えたのです。

山は、なにか海が、自分にあいずをするのだと思いました。だから、自分もわらって答えました。そして、その日から、二人はいくらか、知り合いになったという感じがしました。

なにごとによらず、こうありたいと、熱心に仕事をすれば、いつか、かならず成功するものです。人間が遠くから、たがいには話が出来るようになったのも、電気を発明したからで、やはり自然の大きな力を、知ったからであります。

谷からわき上がる雲が、自由にうごけるところから、山は雲を使い、たてることを、考えつきました。そして、あるときは、山から海へ、また、あるときは、海から山へと、雲は往来したのでした。

海うみの上では、波なみがあつて、波はなぎさへおしよせて、岩いわにくだ
け、しぶきは玉たまのごとくとびちり、遠とおい水平線すいへいせんは、縹ひょう渺びょうと
して、けむるようにかすみ、白しろい鳥とりが、砂浜すなはまで群むれをなしてあ
そんでゐるのを、雲くもは山やまへかえると、おもしろく話はなしました。

また山やまでは、おいしげる木々きぎに、あらしがおそうと、はげしく
枝えだと枝えだをもみあい、そして、頂ちようじよう上うから落ら下つかする滝たきが、さなが
ら雷かみなりのとどろくように、あたりへこだまするものすごい光景こうけいを、
雲くもは海うみへいつて聞きかせることもありました。

こうして、白しろい雲くもは、南なん方ぽうの高たかい山やまから、うごきはじめて、
北きたの海うみのほうへ流ながれていたのであるが、途とち中ゆう、ゆらゆらと平野へいや
をいったとき、そこここに、百しやう姓しやうのすむわらぶきやがあつたり、

煙はたけをたがやす男女だんじよや、馬うまや、牛うしや、犬いぬなどの姿すがたが、ちらちらと見みえました。

こんもり木立こだちのしげるところに、丹塗にぬりの社やしろがあつて、その前まえに、人ひとがひざまずいて、よく祈願きがんをこめていました。ちようどこのとき、男おとこは、神かみさまにお礼れいをいつていたのでした。

「神かみさま、よく私わたしを人間にんげんとして、生うまれさせてくださいました。もし、そうでなかったら、私わたしは毎日まいにち、くるしいめにあつて、なぐられたり、追おいまわされたりしなければならなかったでしょう。それをおかげで、牛うしや、馬うまをつかつて、楽らくに仕事しごとをして、暮くらすことができます。これというのも、人間にんげんに生うまれさせてくださった神かみさまの、おかげであります。」と、もうしていました。

この男おとこが去ると、つぎに社の前やしろまえへきてすわったのは、まだ若い女おんなでありました。彼女かのじよは、熱心ねっしんに手てをあわせ頭あたまをひくくたれて、ねがつていました。

「いま私は、七人にんの男おとこから、結婚けっこんをもうしこまれています、わたしたちころなかあいいおとこ私の心こころの中で愛する男は、その中なかの一人ひとりです。しかし私は、そのことを正しょうじき直ちかに、うちあけることができせん。なぜなら、ほかの六人にんの男おとこたちは、みんな、その男おとこより身分みぶんも高く、物持ものもちであり、勢せいり力りきもありますから、それを知しったら、きつと、そねんで、どんなしかえしを、するかもしれません。私はいつそ、二人ふたりで、山やまのあちらへにげていこうと思おもいましたが、くまや、おかみのいる森もりや、谷たにを奥深おくふかくはいらなければなりませんので、

食くい殺ころされることなしに、ぶじいけると思おもいませかみん。神さま、どうしたら、私わたしども二人ふたりは、安全あんぜんにゆくすえ長ながく添そいとげられま
すか、あなたのお力ちからで、おすくいくださいますし。」と、しばらく、
頭あたまを地じにすりつけていたのです。

やがて、秋あきの取とり入いれがすむと、村むらの祝いわまつい祭まつりが、社やしろの境けい内だい
で、もよおされました。彼女かのじよはこの日ひ、七人にんの男おとこたちから受うけ
た七面めんの鏡かがみを、ひもでとおして、首くびにかけておどるのです。神かみ
のお告つげをまつて、どひとりの一人にか、きめなければなりません。

くわしいわけを知しつた身寄みよりのものたちは、なにか、かわつた
ことが起おこらなければいいかと、しんぱいしました。ちようど、
社やしろの上うへの空そらには、入いり日ひをあびて、雲くもの色いろがまっかに見みえました。

「どうぞ神さま、用のない鏡は、みんな、くだいてください。そして、ただ一面だけを、私に永久にさずけたまえ。」と、となえながら、身を飛鳥のごとくひるがえして、上へ下へと、おどつたのでした。

社のまわりにともる、ろうそくの火が、鏡の面に、ちらちらとうつりかがやきました。

七人の男たちが、胸をいためてまつたかいもなく、彼女は、ふと病んで、まだ秋の木の葉がちる前に、あわただしく、この世から去つたのであります。

社の裏手の方へ、用水池がつくられたのは、この後、二百年くらいも、たつてからのことでした。そのうち、山の上にわく白

らくも雲が、海のほうへ流れていったとき、その姿を、いくたび、この水面にうつしたかしれません。

若い女のうずめられたところは、いつしか、古墳といわれるようになりしました。そして、それからまた、幾百年の月日がたつたのであります。山や、川や、野原には、かくべつのかわりもなかったけれど、町や村は、その時代によって、ようすがちがい、人も馬も牛も、また幾代かの間に、たびたび生き死にしました。丹塗りの社も、長い月日の雨風にさらされて、くちたり、こわれたりして、そのたびに、村人によって建てかえられたけれど、まだわずかに、昔の面影だけは、のこっていました。しかし、古墳のくわしい記録などは、もはや、どこにものこっていま

せんでした。ただ遠い祖先とお せせんのものにちがいないが、いまの村人むらびとには、その造られた時代つく じだいすら、よくわからなかったのです。

学者がくしゃが、池いけのほとりに立たつて、心こころありげに、よくあたりの景色しきをながめていると、学者がくしゃを案内あんないした役場やくばの若い書記しよきが、かたわらで、伝説でんせつめいたことを聞きかせました。

「年寄としよりのいうことですが、なんでも静しずかな真昼まひるごろ、足音あしおとをたてずに、池いけへ近ちかよると、金銀きんぎんの二匹ひきのへびが、たわむれながら、水面すいめんを泳およいで、お社やしろのほうへ、上あがっていくのを見みることがあるといえます。もし、それを見みたものは、近ちかいうちに、きつとしあわせなことがあると、昔むかしからいうそうです。」と、語かたつたのであります。

だまつて、これを聞いた学者は、ほかにも、こんな伝説があるのか、うなずいていましたが、

「この古墳を掘ってみたいのですが、どうか学問研究のため、ぜひゆるしてもらえますか。」と、そのとりはからいかたを、書記にたのんだのでした。

「さあ、村長さんや、神主さんたちが、なんといわれませんか、聞いてみなければわかりませんが、いつかも、そういう話があったとき、たたりを恐れるからといって、だれも、手をつなかつたのです。」と、書記はいいました。

「私は、たぶん、なにか新しい発見ができるような気がするのです。」と、考古学者は、自分の考えをもらしました。

学者がくしゃが学問がくもんのためというので、書記しよきも心をうごかせられ

たらしく、熱心ねっしんに説きまわってくれるのです。そのかいあつて、

ついに村むらで発掘はつくつをゆるしました。

春はるびよりの、あたたかな日ひでした。畑はたけの中なかの古墳こふんのかたわらに

は、一本ぼんのかききの木がありましたが、小枝こえだにのびた、つやつやし

い若葉わかばは、風かぜにふかれて光ひかっていました。そして、白しろい星ほしのよう

な花はなが、咲さきかけていました。

ここへ集あつまつてきた村むらの若者わかものたちが、土つちをほるため、くわを

ふるっていました。べつに、ひびきをたてるほどでなかったけれ

ど、かきはなの花は、もろく枝えだをはなれて、ぽとりぽとりと、つめた

い地ちへ落おちるのでした。

「花でも、葉でも、秋の末まで、まんぞくにのこっているのは、すくないものだ。」と、これを見て感じたものか、書記は木を見上げながら、いっしょにはたらく学校の教員ふうの男と、話をしていました。

土中深く、石をまわりに積んである棺が、掘りだされたのは、ようやく春の日の、かたむくころでありました。

棺の中には、底にのこっている白骨と、不完全な土器と、七つの鏡などがあつて、人々の目をひいたのでした。その死者は、学者が、骨格から判断して、まだ若い女であつたとわかりました。

鏡は七面のうち、六つまで、さびきつて、ぼろぼろにくさつて

いたけれど、どうしたわけか、ただ一面^{めん}だけ、くもっているけれど、なお、いくぶん^{ひかり}光をたたえて、あかるみへ出^だすと、ものの影^{かげ}さえ、おぼろげにうつるのでした。

「どうして、この一面^{めん}だけが、くさらなかったろう?」

そのことが、みんなの、疑問^{ぎもん}となりました。

「おなじ、金^{きん}属^{ぞく}で造^{つく}られたであろうに、どうして、この一つだけが、くさらなかったのでしょうか。」と、役場^{やくば}の書記^{しよき}は、学者^{がくしや}にむかつてたずねました。このなぞは、たとえ、学者^{がくしや}でも、すぐには、解^とくことができなかったのです。

そして、いく日^{にち}かの後^{のち}でした。博士^{はかせ}は研究^{けんきゆう}室^{しつ}の窓^{まど}から、しばらく^{あいだ}の間に夏^{なつ}らしくなった、外^{そと}のけしきに見^みとれていました。

ひでりつづきのため、白^{しろ}つぽく、かわいたアスファルトの道^{みち}は、すこしの風^{かぜ}にも、ほこりをたてていました。そして、せわしげに^{ある}歩^{ひと}いている人々の姿^{すがた}や、道^{みち}ばたにならんでいるプラタナスの影^{かげ}が、ちらちらと道^{みち}の上^{うへ}にうごくのが、なんとなく、わびしげにさえ見^みえるのでした。

研究^{けんきゅう}室^{しつ}につとめている助^じ手^{しゅ}の小^お田^ださんは、また青^{せい}年^{ねん}詩^し人^{じん}でもありました。詩^し人^{じん}なればこそ、幾^{いく}世^{せい}紀^き前^{まえ}の人間^{にんげん}生^{せい}活^{かつ}に興^{きょう}味^みをもち、心^{こころ}で美^{うつく}しく想^{そう}像^{ぞう}し、また、あこがれもしたのであります。

博^は士^{かせ}は、へやへはいってきた小^お田^ださんに、こんどの旅^{りょ}行^{こう}で見^みた北^{ほく}国^{こく}や、いろいろ経^{けい}験^{けん}したことを、くわしく話^{はな}しました。

たとえば、丹塗りの社があり、用水池があり、古墳はそれのかたわらにあつたことや、伝説の話や、棺を掘つたときのありさまなど、当時のことを、思い出しながら語つたのであります。

助手の小田さんは、目をかがやかして、博士のいうことを聞いていました。

「ただ、ふしぎなことが一つあつた。それは、棺の中にあつた七面の鏡が、一枚だけくさらずに、いまも光っているが、あとは六つとも、さびて、ぼろぼろになつていたことだ。おなじ金で造つたのであろうが、それは、どうしたことだろうか。」

博士は首をかしげながら、かばんの中の、古鏡をとり出して、小田さんにしめしました。

「私はわたしこのなぞを、どうしても学問がくもんのためにも、解とかなければならない。」と、博士はかせはつづけていいました。

「むかしは、鏡かがみを女おんなのたましいともいいましたから、これには、たましいが、はいつているのかもしれないね。」と、さすがに小田おださんは、詩人しじんらしい感想かんそうをもらして、うけとった鏡かがみを、ていねいになでながら、しばらく、じつと見みまもっていました。

「この金属きんぞくを、分析ぶんせきしてみなければ、わからぬことだ。おなじ金属きんぞくでつくったものなら、この一つだけが、くさらぬというわけがあるまい。」と、博士はかせは、科学者かがくしゃなら、空想くうそうを事実じじつとして、信しんずるわけにいかないと、ひややかな調子ちょうしで、助手じょしゅに答こたえたのであります。

このとき、博士は、古墳の発掘をてつだつてくれた役場の若い書記にしろ、学校の先生にしろ、話を聞いていると、みんな若い人たちは詩人であつて、物質だけをたよりとしていない、そのことは、いままでの学者たちとちがつて、たましいのありかを知るといふいきかたで、考古学の将来に、明るい道が開けるような気がしたと、助手の小田さんにむかつていったのでした。

その翌日のことです。博士は研究室へ出かけて、旅行先で集めてきたいろいろの材料を、よくしらべて、配列するのをたのしみとしました。

「先生、おはようございます。やはり、あの鏡は、ふしぎであ

ります。先生せんせいのおいでなされるのを待まっていました。」と、昨夜うべは、研究室けんきゅうしつで宿直しゆくちよくした小田おださんは、博士はかせの顔かおを見るや、とびつかんばかりに訴うったえたのでした。

「ふしぎなことつて、どんなことだね。」と、博士はかせも、なんとなく、胸むなさわぎを感じかんしました。

「まあ、こちらへいらして、ごらんください。」と、助手じょしゆの小田おださんは、先さきに立たつて、博士はかせを、しんとした、うすぐらい研究けんきゆ室うしつへ案内あんないしました。

そこには、大おおきなろうそくが、ともされていました。かげろうのうごくように、ろうそくの火ひは、下したにおかれた鏡かがみのおもてを照てらしていました。

博士は心をおちつけて、鏡をのぞくと、そこにあやしげな身な

りをした、男女がならんで、おぼろげに浮き出ていました。

年とつた、この考古学者は、しばらく目を、鏡からそらさず

に、沈黙していましたが、そのうち、うめくように、

「ああ、やはり女は、七人のうち、この鏡をくれた男だけを、深

く愛していたとみえる。」と、はじめて、そのなぞが、解けたと

いわんばかりに、ひくい声でさげびました。

「先生、するとこの女は、貞操をまもりたいばかりに、だま

って死をえらんだのですね。」と、小田さんが聞きました。

「たしかにそうだよ。死んでから、地下で二人は、永久の幸

福をもとめて、約束をはたしたんだね。」と、博士は答えま

した。

「せいようりゆう西洋流ですと、こんやく婚約のゆびわ指輪をおくる風習ふうしゅうがあります
が、とうよう東洋は日本にっぽんでも、昔むかしから、女おんなの心なこころをうつすといつて、かがみ鏡
をたいせつにしましたが、こんやく婚約にも用もちいられはしなかったでし
ようか？」と、小田おださんは、うたがいをもつらしく、ただしまし
た。

「女おんながかがみ鏡を命いのちのごとく、たつとんだのは、わかつているが、主しゅと
して結けつ婚こんしてからことで、こんやく婚約にかがみ鏡をおくったかどうか、
よくわからない。約束やくそくをおもんじた昔むかしのことだから、たとえかがみ鏡
をつかつたとしても、ふしぎのないことだが、古ふるい文ぶん献けんをしら
べたら、もっと、おもしろい発見はっけんが、あるかもしれぬ。」と、

博士^{はかせ}は、答え^{こた}ながら、頭^{あたま}をかしげていました。

「できることなら、この鏡^{かがみ}を、もとの墓所^{ぼしよ}にうずめてやりたい。」
と、いった若い助手^{わかしゅ}のねがいを、考古学者^{こうこがくしや}である博士^{はかせ}は、ついに許^{ゆる}したのでした。

助手^{じしゅ}の小田^{おだ}さんが、鏡^{かがみ}を新しい木箱^{きばこ}におさめて、北国^{ほっこく}へ旅^{たび}立^たつたのは、夏^{なつ}もなかばすぎた日^ひのことで、烏帽子岳^{えぼしだけ}のいただきから、奇怪^{きかい}な姿^{すがた}をした入道^{にゆうどうぐも}雲^{うみ}が、平野^{へいや}を見おろしながら、海^{うみ}の方^{ほう}へと、むかつていくところでありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「うずめられた鏡」金の星社

1954（昭和29）年6月

初出：「女学生の友」

1953（昭和28）年8月

※表題は底本では、「うずめられた鏡《かがみ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年9月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

うずめられた鏡

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>